

睡眠剤や抗うつ剤で殺人、躁病様症状など

症例1：殺人が無罪となった [8]

68歳の女性Aが、70歳の夫B（10年前から脳梗塞後遺症のため半身不随）を介護していた。AはBの異性問題から以前ガス自殺を図ったことがある。ある日、2人で飲酒後（Aは約25g相当のアルコール、アルコール5%のビールなら500mL相当を飲酒）、睡眠剤のプロチゾラムをおそらく6錠（あるいはそれ以上）服用して入眠した。服用後4～5時間後と思われる深夜、隣家に住む長女宅を訪れ、「じいちゃんを殺しちゃっ

化しつつある状態との比較では、間違え恐れがあります。

症例2：抗うつ剤パロキセチンによるせん妄の一部が中止で消失した [9]

87歳女性（Cさん）。Cさんは、文献 [9] の著者らの医療機関を受診する7年前から口腔内に時折疼痛を感じて歯科医による診察を繰り返し受けたが、口腔内に顕著な変化は認められないとのことであった。2年